

ICS-24M-22MM301

卒業論文、修士論文のタイトル

指導教員

教授

令和7年2月10日提出

工学部情報工学科

XXYYZZZ

氏名

埼玉大学 理工学研究科・工学部
研究室

埼玉県さいたま市桜区下大久保 255

概要

概要は，簡潔にまとめること．また，論文の構成も概要の最後に示すこと．

謝辞

研究ならびに生活面においてご指導いただきました 教授に深く感謝いたします。

また，先輩としていつもよきアドバイスをくださいました， 氏， 氏をはじめとする研究室の皆様，そして同期学生の皆様，並びに私を暖かく見守って頂いた両親はじめとする周囲のすべての皆様に深く感謝いたします。

目次

概要	i
謝辞	ii
図目次	v
表目次	vi
第1章 はじめに	1
第2章 実験	2
2.1 実験方法	2
2.2 実験結果	2
2.3 図の例	2
2.4 表の例	2
2.5 箇条書きの例	3
第3章 考察	5
第4章 おわりに	6
4.1 まとめ	6
4.2 今後の課題	6

公表論文	7
参考文献	8
付 録 A	10
A.1 ほげほげ	10
A.2 ほりゃほりゃ	10
付 録 B	11
B.1 ほげほげ	11
B.2 ほりゃほりゃ	11

目 次

2.1 The relationship among the parts of EnCal	4
---	---

表 目 次

2.1	The number of elements of $F_k(CML)$ and $FS_k(CML)$	3
-----	--	---

第1章 はじめに

背景

目的

構成。章や節番号を参照する場合には「1 章では...、2 章では、2.1 節では、」などのように記載する。

第2章 実験

2.1 実験方法

実験方法

2.2 実験結果

実験結果

2.3 図の例

基本的には図はページ上部か下部に置くためオプションとしてはtかbを用いる。また、図のキャプション（caption）は図の下に記載する。図の番号は「図 2.1」のように参照する。

2.4 表の例

基本的には表はページ上部か下部に置くためオプションとしてはtかbを用いる。また、表のキャプション（caption）は表の上に記載する。表の番号は「表 2.1」のように参照する。

また、表の罫線については誤解を招かないかぎり少なくすることが一般的である。今回の例では、表見出しの下の罫線を2重線にすることで見出しとデータを見やすく分けている。また、縦の罫線は削除している。

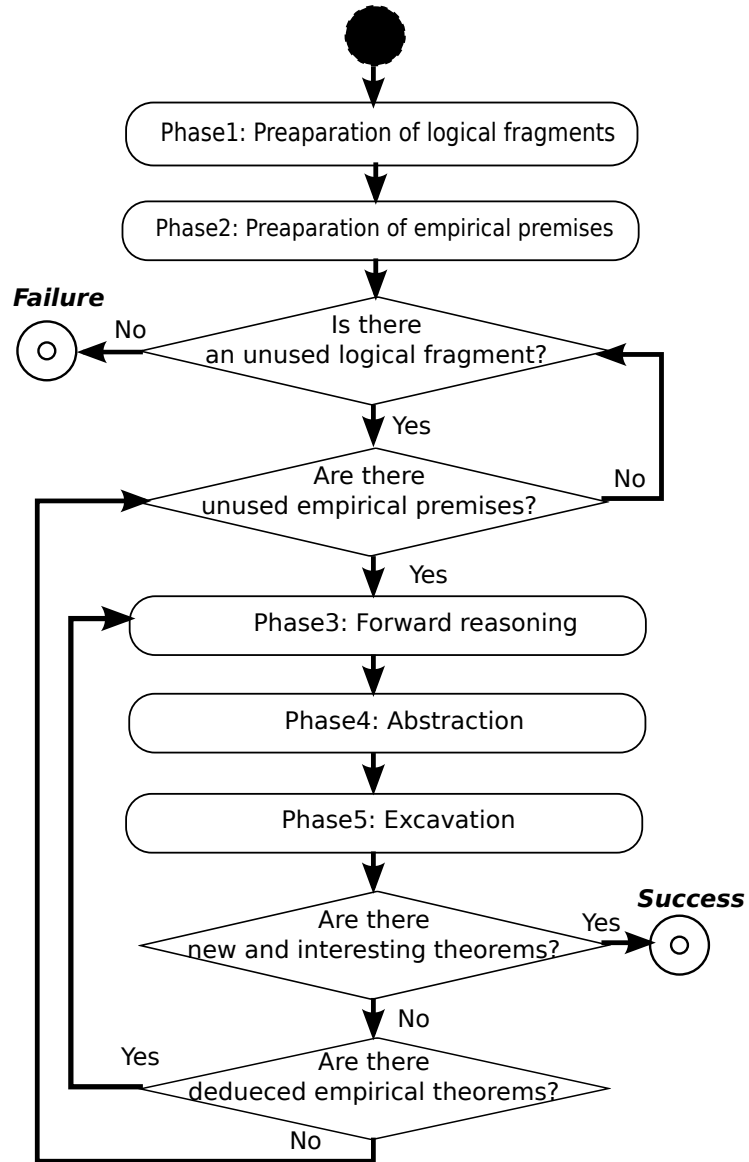
表 2.1: The number of elements of $F_k(CML)$ and $FS_k(CML)$

degree	$F_k(CML)$ (a)	$FS_k(CML)$ (b)
1	1.60×10^1	4.00×10^0
2	2.26×10^3	2.60×10^2
3	1.67×10^8	8.90×10^6
4	2.92×10^{19}	5.15×10^{17}
5	1.63×10^{45}	6.31×10^{42}
6	4.29×10^{103}	2.13×10^{100}
7	1.02×10^{235}	3.09×10^{230}
8	8.15×10^{527}	5.61×10^{521}

2.5 箇条書きの例

箇条書き前の段落です。ああああああああああああああああああああああ
ああああああああああああああああああああああああああああああ。

- ああああああああああああああああああああああああああああ
あああああああああああああああああああああああああああ
- いはいはいはいはいはいはいはいはいはいはいはいはいはいはい
はいはいはいはいはいはいはいはいはいはいはいはいはいい
- ううううううううううううううううううううううううううう
うううううううううううううううううううううううう
- えええええええええええええええええええええええええええ
— おおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお
1. ああああああああああああああああああああああああああああ
あああああああああああああああああああああああああああ
2. いはいはいはいはいはいはいはいはいはいはいはいはいはいはい
はいはいはいはいはいはいはいはいはいはいはいはいはいい
3. ううううううううううううううううううううううううううう
うううううううううううううううううううううううう
- (a) えええええええええええええええええええええええええええ
(b) おおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお



☒ 2.1: The relationship among the parts of EnCal

第3章 考察

考察

第4章 おわりに

4.1 まとめ

まとめ

4.2 今後の課題

今後の課題

公表論文

[P1] ほげほげ: あべば入門, 何らか出版社, 200?年?月.

参考文献

- [1] 多川 孝央, 大堀 順也, 程 京徳, 牛島 和夫: 相関論理における強相関性原理, 人工知能学会誌, Vol. 13, No. 3, pp. 387–394, 1998 年 5 月.
- [2] Yusuke Nonaka, Jingde Cheng, and Kazuo Ushijima: A Tasking Deadlock Detector for Ada 95 Programs, Ada User Journal, Vol. 20, No. 1, pp. 79–92, April 1999.
- [3] Inkyu Sa, Zongyuan Ge, Feras Dayoub, Ben Upcroft, Tristan Perez, and Chris McCool: DeepFruits: A Fruit Detection System Using Deep Neural Networks, Sensors Vol. 16 No. 8, Article No. e1222, August 2016.
- [4] 程 京徳: 相関論理入門, 何らか出版社, 200?年?月.
- [5] Qun Jin, Jie LI, Nan Zhang, Jingde Cheng, Clement Yu, and Shoichi Noguchi: Enabling Society with Information Technology, Springer-Verlag, November 2001.
- [6] Matthew Hennessy: The Semantics of Programming Languages, John Wiley and Sons, Ltd., 1990. (マシュー ヘネシー著, 荒木 啓二郎, 程 京徳 共訳: プログラミング言語の意味論入門, サイエンス社, 1993 年.)
- [7] Yuichi Goto, Daisuke Takahashi, and Jingde Cheng: Parallel Forward Deduction Algorithms of General-Purpose Entailment Calculus on Shared-Memory Parallel Computers, Proceedings of the ACIS 2nd International Conference on Software Engineering, Artificial Intelligence, Networking & Parallel/Distributed Computing, pp. 168–175, Nagoya, Japan, August 2001.
- [8] 小出 雅人, 程 京徳: インターネット上でカードゲームを行うための汎用プロトコル群の開発, 情報処理学会第 6 回ゲーム・プログラミング国際ワークショップ論文集, pp. 78–85, 箱根, 日本, 2001 年 10 月.

- [9] Jingde Cheng: Relevance Logic and Entailment Logic, in I. Nakada and M. Hagiya (Eds.), “Software Science and Engineering,” pp. 189–211, World Scientific, November 1991.
- [10] Yusuke Nonaka, Jingde Cheng, and Kazuo Ushijima: A Supporting Tool for Development of Self-measurement Ada Programs, in H. B. Keller and E. Ploedereder (Eds.), “Reliable Software Technologies - Ada-Europe 2000, 5th International Conference on Reliable Software Technologies, Potsdam, Germany, June 2000, Proceedings,” Lecture Notes in Computer Science, Vol. 1845, pp. 69–81, Springer-Verlag, June 2000.
- [11] 後藤 祐一: 強相関論理に基づいた自動前向き演繹とその応用, 埼玉大学大学院理工学研究科情報数理科学専攻博士論文, 2005 年 3 月.
- [12] 後藤 祐一: 強相関論理と汎用前向き自動帰結演算システム EnCal を用いた知識発見, 埼玉大学大学院理工学研究科情報システム工学専攻修士論文, 2003 年 2 月.
- [13] 後藤 祐一: 汎用前向き自動帰結演算システム EnCal の共有メモリ型並列計算機上での並列化, 埼玉大学工学部情報システム工学科卒業論文, 2001 年 2 月.
- [14] Common Criteria Project: CEM v3.1, <http://www.commoncriteriaportal.org/thecc.html> (accessed 2007-04-05).
- [15] 情報処理学会: コンピュータ博物館設立の提言, <http://www.ipsj.or.jp/03somu/teigen/museum200702.html> (参照 2007-02-05).

付 録 A

A.1 ほげほげ

A.2 ほりゃほりゃ

付 録B

B.1 ほげほげ

B.2 ほりゃほりゃ